

『風立ちぬ』における「客体化」表現をめぐって

森 雄 一

1

語り手を1人称で示す小説において、1人称代名詞を明示するか否かが、表現効果において重要な意味を持つことがある。稿者は森(2009)において、このような現象を「修辞現象としての「客体化」という観点から考察した。次の(1)(2)を読み比べれば、1人称代名詞の明示・非明示によってどのような違いがでるか、理解されるであろう。水村美苗『本格小説』の一節で、(1)が原文、(2)は1人称代名詞を非明示にしたものである。

(1) いつのまにか私の頭の中はセピア色をした日本語で溢れ、私は自分が生きたこともない日本を全身で恋い、もう存在しないその日本に帰る日を昼夜夢見ながら暮らすようになっていた。もちろん私の頭にほかのものが影を落とさなかったわけではない。例えばそこにはいつ誰が買ったとも判らない、ページの端が茶に変色した文庫本の翻訳小説もあった。(下線は引用者による) 水村美苗『本格小説』

(2) いつのまにか頭の中はセピア色をした日本語で溢れ、自分が生きたこともない日本を全身で恋い、もう存在しないその日本に帰る日を昼夜夢見ながら暮らすようになっていた。もちろん頭にほかのものが影を落とさなかったわけではない。例えばそこにはいつ誰が買ったとも判らない、ページの端が茶に変色した文庫本の翻訳小説もあった。

両者を読み比べてみると、(1)の方は、自己を外側から眺めて描写している感じが強く、現在から過去の自分を冷静に眺めて振り返るという表現効果が出ている。それに対して、(2)は、その過去の自分の視点からその時の事態を描写するという感じが強い。シュタンツェル(1979:56)の「物語る私」と「体験する私」というタームを借りていえば、(1)は「物語る私」の視点から、語りのなかの自己が描出されているのに対し、(2)は「体験する私」の視点から事態が描写されていると言えよう。この文章は「思えばあのころの私には三つの世界があった」と前置きして過去の自分を回想する場面で、その「三つの世界」の「二つ目の世界」について語っている。単に過去に埋没して、その視点から描写するのではなく、三つの

世界を対比的に捉え、過去の自分について見つめ直すということからは、「客体化」的な表現をとる（1）の方がふさわしいと言える。

このような「修辞現象としての「客体化」」という観点から、堀辰雄の1人称小説はきわめて興味深い材料を提供してくれる。すでに森（2009）で引用した通り、佐藤・佐々木・松尾（2006）は、次のような堀辰雄『眠れる人』の例をあげ、不必要に同じ語を繰り返す「剰語的反復」の例として捉え、その表現効果としては、1人称代名詞を明示する必要のないところで、あえてそれを行うことにより、「観察している「私」」が、外側から「観察されている「私」」を捉えることになっていると論じる。この分析は、「外側から見た自己」を捉える表現として、「客体化」としての「1人称代名詞の明示」を捉える森（1998）（2009）と明らかに共通するものである。

- （3）僕は化石したやうになつてそこに立つてゐる。僕はもうそこに坐つてゐるのだと信じながら。僕は僕の手から帽子を落す。しかし、それにも気がつかない。それにもかかはらず、僕は僕が少しも取乱したところのない冷静な様子をしてゐるのを不思議に感じる。（下線は、佐藤・佐々木・松尾（2006）による。）
堀辰雄『眠れる人』

本稿の目的の一つは、このような1人称代名詞の明示による「客体化」が代表作『風立ちぬ』のなかにもどのように表れているかを見ることにある。しかしながら、堀辰雄の1人称小説に見られる「客体化」は、1人称代名詞の過剰的使用という点のみにはない。渡辺（2002）の指摘するように、『風立ちぬ』において、本来、非自己に対して用いられる「ひとごとの表現」を1人称代名詞と共存させている点も「客体化」の観点から捉え直すときわめて興味深いものである。

以下、2節では、『風立ちぬ』に見られる「ひとごとの表現」を「客体化」の観点から考える。3節では、『風立ちぬ』に見られる、「重複する「私」」について、4節では、「主体化」的表現と「客体化」的表現の混在について論じ、あわせて今後の課題について付す。

2

以下の（4）では、1人称代名詞「私」について「しばらく考へ深さうに佇んでゐた」と描写されている。また、（5）は、「私」と「不安さうに感じてゐた」が結びつけられている。両者とも読み手に違和感を与える表現であろう。

- （4）或る晩、私は彼女の側で本を読んでゐるうち、突然、それを閉ぢて、窓のところに行き、しばらく考へ深さうに佇んでゐた。それから又、彼女の傍に帰つた。私は再び本を取り上げて、それを読み出した。（p500）（下線部

は引用者による。以下同様。『風立ちぬ』の引用は『堀辰雄全集（筑摩書房）第一巻』により、漢字は新字体に改めた。

- (5) 夜伽に疲れた私は、病人の微^{まどろ}睡んでゐる傍で、そんな考へをとつおいつしながら、この頃ともすれば私達の幸福が何物かに脅かされがちなのを、不安さうに感じてみた。(p498)

このような表現が堀辰雄の1人称を語り手とする小説において用いられていることについて、まとまった形で考察しているのは渡辺(2002)である。

渡辺(2002)では、「しばらく考へ深さうに佇んでみた」「不安さうに感じてみた」のような表現を、本来、非自己に対して用いられる「ひとごとの表現」とし、堀作品における1人称代名詞との共存について次のように述べる。

一人称の「私」と「ひとごと」の「～そうだ」との共起の可能性が、語学的に、まだ他に開かれていないわけではない。「私」という一人称代名詞を使いながら、それを三人称「彼」と同じレベルのもの、言語表現する自分(言表主体)と切り離された、対象化されたレベルのもの、と扱う書き方をすれば、それが可能であると思われる。ただし、体質的に言表主体の気持や評価を濃厚に表現することを好む日本語の場合、「私」を「彼」と同次元に対象化することは至難の業に属するかと思われ、従って事例は挙げ難く、むしろ現実には日本語において実現し難い性質のもの、と言ってしまつてよいかも知れない。

(渡辺 2002 : 166)

このように「現実には日本語において実現し難い」と述べるのではあるが、堀作品においては、『風立ちぬ』(恐らく他の堀の作品でも)の「私」は、自分の行動を自分の意志で律する、という意味での意志主体であるよりは、極めて自然にそういう事態の中心になっている人物であるように、性格づけられているのだと思う。」(渡辺 2002 : 174) とこのような表現の使用について結論づけられている。

渡辺(2002)では、また、次の(6)の例をあげ、これは「夢想」であるが故に許容されると述べている。

- (6) やがてそれがばちばちと活潑な音を立てて燃え出し、その音で漸つとその娘が目覚ます時分には、もう私はかじかんだ手をして、しかし、さも愉しさに、いま自分達がさうやつて暮してゐる山の生活をそつくりそのまま書き取つてゐる……

今朝、私はさういう自分の数年前の夢を思ひ出し(後略)(p514)

しかしながら、(6)のような夢想内容(この場合の夢は、睡眠時に見る夢ではなく、将来への希望としての夢である)と(4)(5)のような回想内容とで、時制に関してならともかく自己表現に関する表現上の区別をしなくてはならない理由はないように思える。どちらも「観察する私」が、「体験する私」を外側から記述した表現と考えてよいのではないだろうか。

『風立ちぬ』の構成として、前半の「序曲」「春」「風立ちぬ」の各章は、冒頭部の(7)(「序曲」)や、(8)(「春」)、(9)(「風立ちぬ」)に見られるように、出来事の時点ではなく、語りの現在時点を描写したような表現も時折出てくるが、基本的には、現在から過去の出来事を回想した視点で描かれている。

(7) それらの夏の日々、一面に薄の生ひ茂つた草原の中で、お前が立つたまま熱心に絵を描いてみると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たへてゐたものだつた。さうして夕方になつて、お前が仕事をすませて私のそばに来ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合つたまま、遙か彼方の、縁だけ茜色を帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆はれてゐる地平線の方を眺めやつてゐたものだつた。(p452)

(8) そんなことまで心の裡で考へながら、それには少しも自分では気がつかずに、私はかへつて何んでもないやうに見える些細な印象の方にすつかり気をとられてゐたのだ。……(p470)

(9) 私は、私達が共にした最初の日々、私が節子の枕もとに殆んど附ききりで過したそれらの日々のことを思ひ浮べようとすると、それらの日々が互に似てゐるために、その魅力はなくてはならない単一さのために、殆んどどれが後だか先きだか見分けがつかなくなるやうな気がする。(p481)

後半の「冬」「死のかげの谷」の2章では、日付が記され、日録形式でその日の出来事や過去の回想が「私のノオト」(p516)に記される形式をとる。

語りの時点と出来事の時点が離れているか否かという差はあるものの、前半と同様に、現在から過去の出来事を回想した視点で描かれているとしてよい。いずれにせよ、現在、自己が見たままを書くのではなく、過去の自己を回想して書くのであるから、自己を「客体化」して描写した表現が、表現上の工夫として出てきたとしてもおかしくはない。それが堀辰雄独自の言語実験にとどまり、その後の日本語表現のなかに定着しなかった故に、今日の眼から見ると奇異な表現と感じられるのであろう。

後述するように、『風立ちぬ』のなかには、「私」を一文に重複して述べることによって客体化表現を試みた表現も出てくるが、渡辺(2002)の言うところの「ひと

ごとの表現」を使用することによって「客体化」の表現効果を出した例は多々ある。それに関係すると考えられる表現をもう少し見ていこう。先に示した(4)(5)が、作品の前半部にあたる「風立ちぬ」の章のものであったので、まず、後半部にもこのような例が見られることを示す。(10)が、「冬」の章、(11)が「死のかけの谷」の章の例である。

(10) そのあとですぐ私は不安さうに節子の目を求めた。(p526)

(11) 私は何度もそのサナトリウムの入口に立つては、電報で呼び寄せたお前の父の来るのを待ち切れなさうにしてゐた。(p533)

以上のように、前半部・後半部を問わず、自己を「客体化」した表現は、『風立ちぬ』に表れている。以下では特に例を挙げる際、前半部・後半部の区別について言及しない。

(12) 私はまだ不満らしく、お前のいくぶん気づかはしさうな視線を自分の上に感じながら、しかしそれよりももつと、私達の頭上の梢が何んとはなしにざわめいてゐるのに気を奪られてゐるやうな様子をしてゐた。(p453)

(12) は、自己の内面を描写するのに、「不満らしく」という推定の表現が使われている。このようなものは「～そうだ」と同様に典型的な「ひとごとの表現」で、これが自己表現と結びつくことで「客体化」の表現効果をあげている。

(13) 私はとうとう焦れつたいとでも云ふやうな目つきで、お前の方を見返した。(p454)

(13) は、自己の「目つき」を描写するのに「焦れつたいとでも云うやうな」という表現が用いられている。この場合、「体験する私」の視点から事態が語られていれば、自己の心情は明確なわけであり、このような表現は取る必要がない。外側から自己を描写するという効果が強く出ているのは(12)と同様である。

渡辺(2002)のいう「ひとごとの表現」からは外れるが、外側からの自己描写という観点からは、(14)も「客体化」の例として挙げられる。また、(15)は、「体験する私」の視点を取っているのなら、「自分の部屋に戻つて来た」と述べるところを、外側からの描写であるが故に「自分の部屋に戻つて行つた」と描かれている。

(14) なんだか浮かぬ顔をしたまま、私もその相談に加はり出した。(p469)

(15) 私は何か気軽に調子で返事をしてやりたいと思ひながら、彼女の方をふり向いた。が、大きく^{みは}睨つて気づかはしさに私を見つめてゐる彼女の目と見合はせると、そんな言葉は出されなかつた。さうして無言のまま窓を離れて、自分の部屋に戻つて行つた。(p510)

(16) と (17) は、意図的に「独り言のやうにつぶや」いたり「一つの蒼がなんだか気になつてならないと云つた風をしてゐた」りしているのなら、自己表現としては通常のものであろう。この場合、そのように解釈することは不可能ではないが、普通の読みとしては、外側から自己を描写していると考えることの方が自然である。

(16) 私はさう独り言のやうにつぶやきながら、やつとその窓から離れた。(p489)

(17) 「それはいいでせうけれど……」と私は口ごもりながら、さつきから目の前にきらきら光つている一つの蒼がなんだか気になつてならないと云つた風をしてゐた。(p460)

以上に見たように、『風立ちぬ』では、「ひとつごとの表現」の使用やそれに類した外側からの描写による「客体化」が試みられていたことが確認できた。次節では、1人称代名詞を明示することによる「客体化」がどのように表れているか見てみよう。

3

(3) で挙げたような「僕は僕の手から帽子を落す」「僕は僕が少しも取乱したところのない冷静な様子をしてゐる」といった、同一節中で、1人称代名詞を繰り返す例は、『風立ちぬ』のなかでは稀である。数少ない例が次のようなものである。

(18) やがて私は、私の背後に深い溜息のやうなものを聞いた。(p471)

この場合、誰の「背後」かということは特に明示せずとも自明である。にもかかわらず、「私の背後」と記述することで、事態を外側から眺めるような効果が出ていることは、(3) と同様である。このような同一節中の1人称代名詞の繰り返しかえて、『風立ちぬ』では、次のように「自分」を用いて指示されることがある。

(19) しかし私がそれを気づかはしさに自分の目で追つて見ると、ただ空を見つめてゐるきりだつた。(p471)

(20) そのとき私は自分の背後で深い息のやうなものを聞いたやうな気がした。

が、それがまた自分のだつたやうな気もされた。私はそれを確かめでもするやうに、彼女の方を振り向いた。(p482)

このような「自分」を用いた表現については、森(2009)では、状況主体(文中で行為者として示されているもの)から見た自己と話し手(語り手)から捉えられた自己が混じり合っている二面性を持つ表現として論じた。同一節中に1人称代名詞を繰り返す例だけではなく、『風立ちぬ』のなかでは、以上のような表現が用いられているのである。

『風立ちぬ』のなかで頻出するのは、複文(複数の節を持つ文)において、それぞれ1人称代名詞を明示する表現である。

- (21) そしていよいよ私も出発しようとする前日、私はひさしぶりでホテルから散歩に出かけて行つた。(p456)
- (22) 私はすぐ何か答へたかつたが、何んの言葉も私の口からは出て来なかつた。(p471)
- (23) その上には全く人けが絶えてゐたので、私は構はずに歩き出しながら、病室を一つ一つ覗いて行つて見ると、丁度四番目の病室のなかに、一人の患者の寝てゐるのが半開きになつた窓から見えたので、私はいそいでそのまま引つ返して来た。(p476)
- (24) 私が自分の裡にさういふ見知らないやうな人間性をぼんやりと意識しはじめたのは、入院後間もなく私が院長に診察室に呼ばれて行つて、節子のレントゲンで撮られた疾患部の写真を見せられた時からだつた。(p479)

(21) ~ (24) で用いられている「私」は、すべて明示しなくても表現として成り立つものである。特に、それぞれ下線を施した「私」が明示されていることによってややぎこちのない表現となっていることに注意されたい。しかしながら、「私」を重複させることによって、自己に関わる事態を外側から眺めて記述している試みととることもできる。『風立ちぬ』では、同一節内で「私」を重複させて使用する表現は避けられているが、このような形で「客体化」の効果が得られようとしているのである。2節で論じた、「ひとごと」的表現による自己の描写とともに、堀によって試みられたこのような言語実験がその後の日本語表現になかに定着しなかつたが故に、今日の日から見ると奇異な表現となっているであろう。しかしながら、日本語の可能性を開拓しようとして試みとして改めて評価がされてもよいのではないだろうか。

その試みは、すべての回想によって語られている場面をこのような「客体化」による表現によって統一しているだけではなかった。語り手が事態のなかに没入して述べる主体化的表現が混在させている例も多々あるのである。次節ではそのような表現を見てみよう。

4

以下の(25)は、下線部において「私は～歩きにくさうに歩いて行つた」という「客体化」表現がとられている次の文に、波線部において語り手の視点から見た風景が描写されている。この場合、語り手が事態のなかに没入していると言え、「客体化」とは反対の「主体化」的な表現となっていると言えよう^(注1)。(26)も同様に、下線部の「客体化」表現と波線部の「主体化」表現が連続している。

(25) 私は考へあぐねたやうな恰好で、だんだん裸根のごろごろし出して来た狭い山径を、お前をすこし先きにやりながら、いかにも歩きにくさうに歩いて行つた。そこいらはもうだいたい木立が深いと見え、空気はひえびえとしてゐた。ところどころに小さな沢が食ひこんだりしてゐた。(p454)

(26) その晩、私は一人でつまらなさうに出かけて行つた散歩からかへつて来てからも、しばらくホテルの人けのない庭の中をぶらぶらしてゐた。山百合が匂つてゐた。私はホテルの窓がまだ二つ三つあかりを洩らしてゐるのをぼんやりと見つめてゐた。(p455)

『風立ちぬ』においては、このように「客体化」的表現と「主体化」的表現が切り替えられて用いられるのも特徴である。これが甚だしい場合は、一つの文の中で、この切り替えが行われている例もある。

(27) 私達の自動車が、みすばらしい小家の一行に続いてゐる村を通り抜けた後、それが見えない八ヶ岳の尾根までそのまま果てしく拡がつてゐるかと思へる凸凹の多い傾斜地へさしかかつたと思ふと、背後に雑木林を背負ひながら、赤い屋根をした、いくつもの側翼のある、大きな建物が、行く手に見え出した。(p475)

(27)は、前半の下線部においては、「物語る私」＝「観察する私」が、「私の乗った自動車」について遠方から眺めている表現である。それに対し、後半の波線部は、「体験する私」の視点から風景が描写されている。

注1 「主体化」については、森(1998)および森(2009)を参照。

2節で述べた「ひとごとの表現」を自己に対して用いる表現や3節で示した、明示する必要のない「私」を複文中に重ねて用いる表現と並んで、このような『風立ちぬ』における表現が、日本語の表現史の上でどのように位置づけられるべきか、あるいは、堀辰雄の文体形成の上でどのように考えるべきか、今後の課題とする他はない。自己の表現において特異な言語実験を行った『風立ちぬ』の試みは、今後解き明かされるべき大きな問題を含み持っている。

付記 本稿は2008～2010年度成蹊大学研究助成（研究テーマ「＜戦前＞の日本語—表記・語法・文体からの多面的考察—」）をうけてなされた研究成果である。

参考文献

- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大（2006）『レトリック事典』（大修館書店）
森雄一（1998）「『主体化』をめぐる」
『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院 1143-1155
森雄一（2009）「修辞現象としての『客体化』」『成蹊國文』第42号 81-90
渡辺実（2002）『国語意味論』塙書房
Franz K.Stanzel（1979）THEORIE DES ERZÄHLENS Verlag Vandenhoeck & Ruprecht 前
田彰一訳（1989）『物語の構造—＜語り＞の理論とテキスト分析』岩波書店

（もり・ゆういち 本学教授）